

神を捨てた偽りの民

ホセア書8章

わたしは多くの戒めを書き与えた。しかし、彼らはそれを無縁のものとして見なした。(12/新共同訳)

北王国イスラエルは表面的には神を礼拝しているように見えながら、実際にはその信仰は内実を失った形ばかりのものとなっていました。にもかかわらず、彼らは自分たちの罪を認めず、神に向かつて偽りの信仰を表明していました。

これに対して主は彼らの虚偽を指摘し、彼らに神の裁きが臨むことを告げられます。「彼らは犠牲を好み、肉をささげてこれを食べる。しかし主はこれを喜ばれない。今、彼らの不義を覚え、彼らの罪を罰せられる」。彼らの信仰の脱線の原因の一つは、神の言葉を喜ばず、それを「無縁のもの」と見なしたところにあります。新改訳では「彼らはこれを他国人のもののようにみなす」とあります。自分たちに向けて語られている神の言葉を、自分たちとは関係のないもの、他国人のものに見なして無視していたというのです。神の言葉によつて生かされ、生きるべき道が定められるはずの神の民が、自ら神の言葉を捨てたのです。これでは神の民としての命を失つて当然のことでした。

この民の姿は、わたしたちにとつて反面教師です。神の言葉によつて生きるべきキリスト者が、神の語りかけを無縁のものに見なしたなら、どうして信仰の命を保つことができるでしょう。神の言葉に耳を傾け、神にしっかりとつながるわたしたちでありたいと願います。